

---

## 東日本大震災における急性期の医療対応

(石橋 悟ほか、日本集団災害医学会誌 17: 32-36, 2012)

2015年5月24日、災害医学抄読会 <http://plaza.umin.ac.jp/~GHDNet/circle/>

---

### I 概要

東日本大震災における石巻赤十字病院での急性期医療対応について記された体験レポートである。震災後のカルテ等の報告からデータを集積し、後ろ向きに解析されている。大部分の病院が震災により被害を受け一時的に医療圏の医療機能が低下したが、石巻赤十字病院は免震構造や自家発電により大きな被害を免れ、ほぼ平時と同様の診療体制で災害医療を行った。

### II 内容

震災当日の患者数は99名と少なかったが、3日目の1251名を最高に、判明しているだけで4303名の患者が震災後一週間で来院した。トリアージカテゴリーは赤271名(6.3%)黄948名(22%)で、来院方法は救急車636名、ヘリコプター337名、自衛隊車両123名、その他歩行・自家用車での来院もみられた。入院患者数も来院患者数の増加に伴って増え、震災後9日目にまで臨時に50床増床することで一日平均38名の臨時入院に対応した。患者が集中し重点的な対応が必要だった病態については以下の通りだった。

#### ① 在宅酸素療法患者

171名が来院。停電によるコンプレッサーの停止や酸素切れが理由である。  
⇒臨時のHOTセンターを開設。自宅が被災している場合は移動先が見つかるまで、そうでない場合は商業電力が復旧して帰宅可能となるまで、入院ではなく避難所として対応した。

#### ② 透析患者

882名が来院。医療圏で石巻赤十字病院以外すべての透析医療機関が被災していたため、透析業務に対応した。

#### ③ 妊婦

2週間で出産58件。他の産科医療機関はすべて被災していた。  
⇒通常5日の入院期間を3日に短縮、自宅がない場合避難所へ退院。

#### ④ 要介護者

68名。慢性期病院、老人施設から避難目的で搬送された。

⇒病気ではないため入院ではなく、介護施設・慢性期病院へ後方搬送した。

#### ⑤ 処方

内服薬を流出・紛失したため処方だけ希望の患者も多く来院した。

⇒処方専用外来を最大8か所開設することで診察を要する患者との混在に対処した。

### III 考察

病人ではないが、介護度の高い要介護者の対応は多数の来院により対応がより困難になるようだ。受け入れ先の不足と、病人と同様に扱うべきであるという認識の欠如が搬送困難の原因と思われる。今後日本はより高齢化社会となっていくため、震災における要介護者への対応は大きな課題になるだろう。

また早期に来院し必要性がないまま撤収したドクターヘリチームやDMATに、時期がずれて必要性が高まった後方搬送を担ってもらえればより充実した後方搬送が行えただろうと筆者は述べている。今回のレポートから、震災直後は家屋周辺が水没して病院へ移動することができないため、来院者数は1日目ではなく3日目に最大になることが判明した。救護チームの派遣の際にこのことを知っておくと非常に役に立つだろう。